

犬が解き放たれるとき 南さあ

学校教育学部 鈴木盛久

アボリジニーの犬

昨秋、約40日ほどオーストラリア、ニュージーランドのフィールド調査を行う機会をいただいた。私にとっては、13年前の南極大陸、3年前のニュージーランドについて、これが都合3回目の南半球への旅であった。今回、最初に訪れたアリススプリングスは、南回帰線に近く、オーストラリアの“へそ”にあたる所で、赤褐色の砂漠の中に突然、小さな町並みがあらわれる。1870年代、当時、英本国への連絡方法が手紙しかなかったころ、ここに電信中継所が設置され、アジア経由でロンドンまでの通信が初めて可能となった。その調査中に湧泉が発見され、それにちなんで町の名がつけられたといわれるだけあって、アカシアやユーカリの緑に包まれた美しいオアシスの町である。

南半球の春先とはいえ、連日30℃を越す暑さであった。町の中心を流れるトッド川、といっても乾期のため、すっかり干上がったかれ谷の砂地を歩いていた時のことである。突然、激しくほえる犬の声が聞こえてきた。まもなく、数匹の犬を従えたアボリジニーの人達が木陰から悠然とあらわれた。

彼らは、この辺りに集団で居住しているとのことであったが、本来の先住民である彼らの祖先達は約3万年前からオーストラリアに住み着いていた。現在の人口は約18万人、オーストラリア全人口の1.2%程度という。大陸を“発見”した最初のイギリス人達がみた彼らは、石器時代そのままの狩猟・採集に依存した生活様式を守り、また岩くつにはすばらしい壁画を残していた。その素朴で迫力に満ちたデザインは、独特の文化として今に

引き継がれている。

オーストラリアの友人Jは、彼らが政府のあつい保護を受けているといていたが、少なくとも私達が垣間見た限り、その生活ぶりは約200年前、ヨーロッパ文明に突然遭遇した時の戸惑いをそのまま引きずっているように思えた。

トッド川の彼らは、歯をむき出した銅犬達が見慣れない我々に向かって飛びかからないよう、首ねっこをずっとおさえてくれていた。気さくで、優しい人達であった。しかし、それだけになおさら、深く刻まれたしわの奥の目に、ある鋭い光を感じたのが妙に心に残った。

園児の帽子

オーストラリアの東部にアーミデルという小さな町があり、そこのNew England 大学に立ち寄った時のことである。構内に実験農場があり、ちょうどそこへ近所の幼稚園児達がたくさん遊びにきていた。さくの中では、鹿やカンガルーが飛び跳ねており、子ども達の歓声がこだましていた。ところが、良くみ



(写真1)オーストラリア New England 大学にて

ると、子ども達は皆、申し合わせたように後ろの首筋を覆う、長い布付きの帽子をかぶっている(写真1)。Jに聞くと、オゾン層の破壊により降り注ぐ紫外線から、皮膚の弱い部分を守るためかぶらせているとのことであった。

また別の日、オーストラリア政府が小学校・中学校の体育の教師達に同じような帽子を配布することに決めたと告げる、大見出しの新聞記事が目にとまった。その理由は上と同じである。

さらに、ニュージーランドに着いて驚いたことに、TVの天気予報のなかで、翌日が晴天の場合、例えば“明日の日光浴時間：32分以内”という細かい注意が付け加えられる。3年前にはなかったことである。やはり理由は同じである。

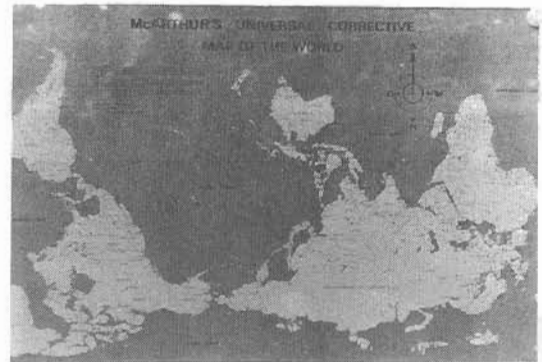
オゾン層のことは、日本を発つ前から気にはなっていたが、南半球で事態がここまで差し迫っていると知ってがく然とした。さらに、私達と同じように、フィールドを歩き回るオーストラリア地質調査所の所員のうちの何人かが、すでに皮膚ガンに侵されていると知るに及んで、事態の深刻さはますます現実味を帯びたのであった。

ここ15年来の成層圏の観測により、全地球的な規模でオゾンが減少が起こっていることが明らかになってきたが、特に南半球における急減傾向は著しい。その主な原因は、20世紀が生んだ最大の発明品の一つであるといわれるフロンにあるといわれる。しかも、世界のフロン生産・消費量の9割以上は日本・アメリカ・ECなど北半球の先進諸国がになっているという。すなわち、オゾンの急減現象に象徴されるように、北半球における生産・経済活動の“しわ寄せ”が今、特に南半球の人達の上に重くのしかかっているといっても過言ではあるまい。

逆さの地図

いま、目の前の壁には、今度の旅行中オーストラリアで入手した、「McArthurの修正世

界地図」という青い地図がかかっている(写真2)。従来の地図とは天地が逆になっており、下半分に広がる北半球の広い大陸を席卷するかのように、上中央にオーストラリア大陸がデンと居座っている。しかし、あの見慣れた地図——下側にオーストラリア大陸、先ほそりの南アメリカ大陸やアフリカ大陸を従えて北半球の大陸が広がる——と比べ、何とも不安定で、落ち着きが悪く、つい天地をひっくり返したくなる衝動にかられる。この落ち着きの悪さというものは、一体何だろうか自問するうち、見慣れた地図の中に見えなくなってしまう大切なことが隠されているのではないかとふと思った。すなわち、私達北半球に住む人間は、北を上にした地図に慣らされることによって、知らず知らずのうちに地球の南の半分をないがしろにし続けてきたのではなかろうかと。



(写真2)南を上にした McArthur の地図

例の修正世界地図の添え書きには、こうある。「従来の地図上での空間的配置によって、国々の優位さが暗黙のうちに決められるということが、北半球の国々によってなされてきたが、ここに正しい地図を示すことにより、我々は本来の地位を取り戻す」と。そして、いわゆる地球の裏側なる汚名はもうごめんだと、“しいたげられてきた南”の復権を高らかに宣言している。

地図の歴史の中で、北を上におくという習わしが定着したのは、北極星を頭上にいただく北半球に文明が開花したと無縁ではないという。しかし、そのような表示法に慣ら

されることによって、北の、南に対するごう慢さのようなものが意識・無意識をとわず培われてきた部分がなかったといえるだろうか。

アリススプリングスのアボリジニーの人達は、私達に対して猛犬をずっと抑えていてくれたが、それは南半球の人達が北半球の人間に対して示している我慢の限界を、まさに象徴したもののように思えてしかたがない。便利さを、そして使い捨てが美德という生活を追求してきた北半球の人間に対して、南の猛

犬が解き放たれるのはそう遠くないかもしれない。さらに、それは人類に対する自然の大きなしっぺがえしに通ずるものかもしれない。そうなる前に、私達がやるべきことは何か、地球の視野にたった上で早急に考えなくてはなるまい。

逆さの地図を前に、今回出会った南の隣人達の顔を思い浮かべながら、“見慣れた風景”の中に隠された落とし穴の恐さを、あらためて感じた今年の正月であった。

